

竹田 泉著

『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命』

——アイルランド・リネン業と大西洋市場——

ミネルヴァ書房 二〇一三・三刊
A4 二四五頁 六〇〇〇円

本書の問題意識は明確である。「イギリス産業革命はなぜ綿織物から発生したのか」ということに尽きよう。毛織物の国であったイギリスがなぜ綿織物の国になり、世界で最初の工業国家となったか。これは、いままでも無数の結論が出されてきた古典的問題である。著者は、アイルランド・リネン業を一つのキーワードにして、この問題への新しい解答を提示しようとした。本書はきわめて意欲的な作品である。

なぜアイルランドでリネン生産が伸びたのか。著者はイギリス重商主義体制下で、本国が毛織物生産に重点をおいたため、アイルランドはそれと競合しない麻の生産量を増大させることになったと結論づける。

本書は、インド・キヤラクについても、新しい知見を提示してくれる。従来、イギリスの綿織物はインド・キヤラクの輸入代替品としてとらえられることが普通であった。著者は、非常に緻密な史料分析の結果、大西洋貿易においてインド・キヤラクの代替品となったのは、薄く、しかも軽く洗濯可能なリネンであったことを実証する。

このように、リネンが大西洋市場形成にとって重要な商品だったという見解は、日本の西洋史学界では出されておらず、ここにも新機軸を見いだすことができる。さらに、ランカシャーはリネンを輸出しており、その麻糸は、アイルランドに依存していた。しかし水力紡績機が発明されると、ランカシャーはアイルランド製麻糸への依存から脱却したばかりか、綿織物の生産へと転換し、綿は、リネンとは独立した製品として販売されるようになる。

本書はこのように、大西洋市場形成をアジアの綿業と関連づけ、しかもリネンと綿業の関係を示しながら、イギリス産業革命に関する新たな視座を提供した書物として、高く評価できよう。

しかしながら評者には、主として二点の疑問点が残った。著者はイギリス産業革命研究における消費面の重要性を重視する。しかし、リネンと綿の消費者が同じ階層の人々でなければ、リネンと綿の消費面からみた連続性は主張できない。史料の限界ということがあるにせよ、その点の解明が不十分であるように感じられた。

もう一つはドイツ・リネンとの関係である。著者は、アイルランド・リネンがドイツ・リネンを模倣したという。大西洋市場における、ドイツ・リネンの重要性については、すでにドイツ史家クラウス・ヴェーバーによって主張されている。だが著者は、そのようなドイツの研究動向に注目することなく、英語で書かれた文献にもとづいた主張をする。なにもドイツの一次史料を使う必要はないが、本書のような研究の場合、ドイツの研究史まで追うべきではなかったか。もしドイツの研究史までもフォローして

いたなら、大西洋経済がいかに多様であり、そのなかでイギリスが産業革命に成功した理由を、より多角的にみていくことができただのではないだろうか。

(玉木俊明)